

一期一会

「400年の謎を解く」

まほろば主人



倭詩 2016 番外編
「今ここに」

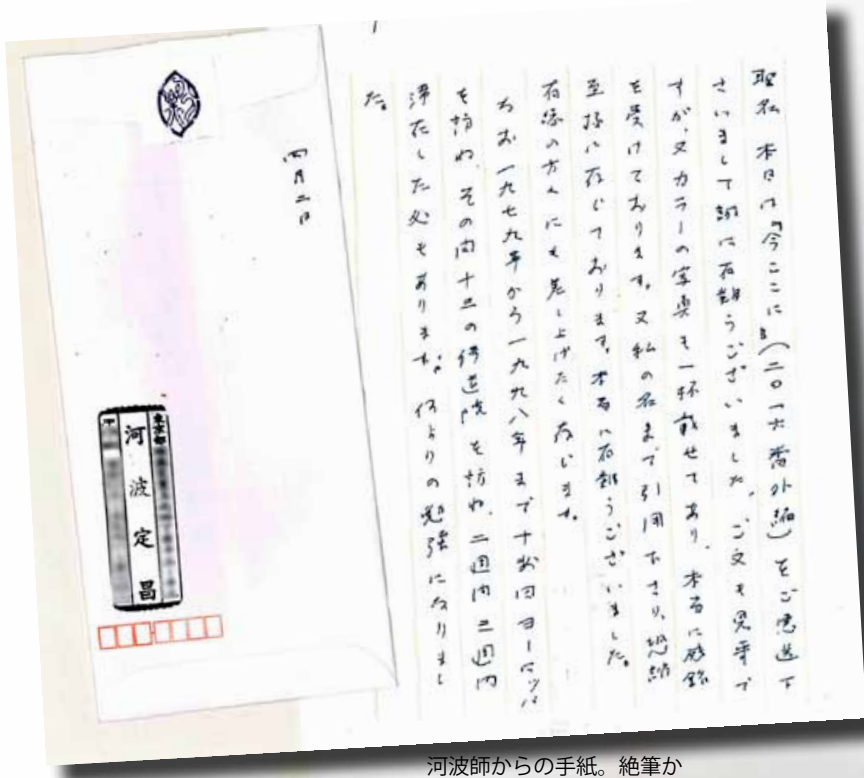
千利休が隠れキリシタンであることを書いた前稿『今、ここに』。上梓してすぐに、この稿の切欠を作って下さった東京・光明園の河波昌東洋大学名誉教授の許に、売り出し初日の4月1日（金）に、速達でお送りした。

すると、4日の月曜日に、2日付けのお礼のご返事を頂いた。

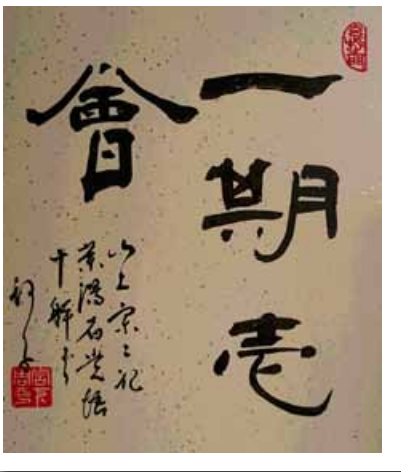
ところが、その夜の10時半、そこにご案内戴いた佐々木有一氏から「昨夜3日、9時半に河波上首が御帰天されました」とのお電話を頂き、「ええ！」と、ただ絶句するばかりで、後の言葉が無かった。

実に、師の絶筆かもしれない信書を握りしめつつ、何か言い知れぬ感慨が沸き起こった。

「一期一会」という古言があるが、2月9日に初めて伺っての一度きりの対面。これから二度とお目にかかれない。何という時の巡りであろうか。



河波師からの手紙。絶筆か



「一期一会」自書。
山上宗二『茶湯者覚悟十体』より



2月9日、東京練馬の光明園を訪問、河波師との初対面を果たす。左は、引導して頂いた佐々木有一氏。氏は長く銀行・企業の重職を歴任後、66歳の退職時に仏縁に会い、発心して10年にして春秋社から大著「近代の念仏聖者 山崎弁榮」を上梓。老齢にして短期間で、難解な仏教哲理を理解され著されたことは、実に驚嘆すべきことである。

久しきキリス基督教の学究成果と茶道の接点に至った師の訓話を拝聴して、これは頂いた命題、何とか答えを出さねばならないと、その時に決した。

それから一月ほど時の熟成を待って、一気呵成に書き上げた。不思議と、色々な思いが重なり合って、一つの結論へと向かったのだ。

茶に馴染みの薄い自分、意識にさえ上らなかつた千利休。だが、二つの流れが、体に入ったかのようを感じられた。

三世の事々が、合して一つになった刹那であろうか。

その思いの丈を書き上げた初稿を、すぐさま師にFAXでお伝えした。

「何の直すところもありません」との勿体ないお言葉を頂戴して、印刷に入った。

その時、利休が隠れキリシタンであったことを、師は密かにお認めになっていらしたが、対外的に今まで表には言葉としてはお出しにならなかつたのか、と気付かされた。

後日、侍従の方から、あの文章を読まれて、大層ご機嫌がよく、3日は殊の外、お元気で、それをコピーして、来客の皆様にお配りになり、そしてその夜示寂された、と。一時のご縁であったが、あの稿がわずかなりともご供養になったのであれば、これに増して有り難くも勿体ないことはなかつた。

実は、原稿を綴っている際、不可思議な情景を想起した。そして、それは一つの確信でもあった。

仄暗い茶室に座し、武将たちに取り囲まれている。



「千家歴代茶杓」右より千利休、少庵、宗旦の茶杓。

キリシタン大名の高山右近、蒲生氏郷、牧村兵部、古田織部、細川忠明の五哲と呼ばれた高弟である。無論、中心は千利休。それが自分の身であったなら、この最後の核心は、基督への信仰話しかない、ということに気付いた。独り無関心、無関係である訳がない。

ああ、利休はこの座で、茶も振舞ったであろう、国のこと、秀吉のこと、様々に問答したであろうが、結びは、耶穌の精神について師弟の垣根を越えて胸襟を開いて話し込まねばならなかつたはずだ。

ここで、利休自身、キリシタンでなければ、話の辻褄が合わない。利休が隠れキリシタンであつてこそ歴史の奥が如実に見えて来

一期一会



蒲生氏郷 (1556-1595)

氏郷は、それ以前に高山右近に引導されてキリシタン大名となり、そして、利休との接点があり、しかも高弟としての待遇と見識を持っていた。利休は氏郷を「文武二道の御大将にて、日本において一人、二人の御大将」と評するほどであった。

るのではないか。その結束力にて爾来400年の磐石の基礎を築いたと感じた。
様々に書かれた利休に関わる書籍や、あるいは映像で、そこまですり込んだものを知らない。だが、この事実はやがて歴史上の真相として証明される日が必ず来るであろう。

何故、門外漢の自分がこれに関わるのか不思議でならなかったが、その因縁が近き祖先にあるこ

とを報された。

戦国武将で信長の女婿、利休七哲の一人、蒲生氏郷。私の母方の倉田家の出自は、会津若松。その先は、日野町生まれの近江商人で滋賀。その領地での大将が氏郷であった。天正18(1590)年、秀吉より時の勲功(42万石から92万石)で奥羽仕置きのため会津に移封された。それより先、私の遠祖で検断(庄屋)となった初代・倉田新右衛門為實は氏郷に命じられ、28年前の永禄5(1562)年に滋賀より会津入りした。そこで、城下町整備のための基盤を築いた後、氏郷を迎え、会津が開かれたという。

少なからず、そのような差し迫った状況の中で、茶の湯と耶蘇教、そして藩主將軍としての責務があった。

ちなみに、会津の築城で、氏郷の郷里・若松と家紋・鶴紋を両つながら由来として「鶴ヶ城」と名付けた。そして、そこに茶室「麟閣」があった。

天正19(1591)年2月28

日、利休自害の前年、既に氏郷は会津に移り住んで居た。千家が茶の湯の世界から追放された折、氏郷は利休の道が途絶えるのを惜しみ、その子・少庵を会津に匿い、徳川家康と共に、千家復興を秀吉に働きかけた。その甲斐あってか、文禄3(1594)年頃、「少庵召出状」が出された。その後、少庵は京に帰し、千家を再興し、一子「宗旦」に引き継がれた。更に、



鶴ヶ城



鶴ヶ城茶室「麟閣」



宗左、宗室、宗守の三人の孫により表、裏、武者小路三千家の基が興隆され、今日にまで継承された。その匿^{かくま}われた少庵が氏郷の為に造ったと伝えられるのが、前述の「麟閣」であった。



千少庵（天文15（1546）年 - 慶長19年9月7日（1614年10月10日））茶人。千利休の養子にして女婿。千宗旦の父。

「少庵召出状」

【大意】

（秀吉様の）御意として申し入れます。あなたを召し出されるとの仰せですので、急いで上洛してください。そのことを申し伝えます。徳川家康と蒲生氏郷が千少庵に宛てた連署状で、「少庵召出状」として表千家不審菴に伝わる。

少庵を匿うのは氏郷であったが、預けたのも利休ではなかったか。いづれにしても両者には言うに言われなき深い絆があった。それは、表は茶の湯、裏は耶蘇教。であるが故に、千



河波定昌:1930年京都生まれ。1960年京都大学大学院文学研究科博士課程修了後、東洋大学に勤務し、同大学付属東洋学研究所所長などを歴任、2000年に退職。文学博士。現在、東洋大学名誉教授、光明修養会上首、米国学士院終身特別名誉会員。その間、明治大学、上智大学（大学院）、聖アントニオ神学院等の非常勤講師、文部省学位授与機構専門部員（哲学神学部門）、放送大学講師等を歴任。前東西宗教交流学会会長、日本宗教学会（名誉会長）、比較思想学会、日本ヤスパース協会、日本クザーヌス学会等の理事・評議員。2016年4月3日没。

家断絶の危機を救ったのは、そして今日の茶道在るは、氏郷の何を以てもの功労、殊勲ではなかったか。

そんな必然的背景を元に、「今、ここに」の結論に至った。

400年の謎が、様々な因縁の糸を手繰り寄せて、ここに溶け解けたように思う。

このお点前の客人とは、これが

最後かもしれないと思いついた時、自ずから襟を正して一一の所作に万感の思いを込めて振る舞う、その心得こそ「一期一会」。

その一期一会の連綿たる連なりこそ、日本の心の歴史でもあるであろう。

河波定昌師との生涯ただ一度の出会い、その「一期一会」の尊さに、如来と人の情けに慟哭^{なげ}く今があった。